

2011年9月

# 「子供のお手伝い」調査

～お手伝いは家庭教育を示すバロメーター～

花王生活者研究センター  
小島 みゆき

平成21年に新しくなった学習指導要領には「生きる力」が掲げられ、その具体的な内容の一つに「家族と家庭に関する家庭教育・家庭生活の大切さ」があげられています。私達は、子供が家事に参加することによって生きる力をはぐくむことができるのではないかと考えています。そこで、お手伝い(子供の家事)がどのような影響を子供に与えるのかを知るために子供のお手伝いについて調査を行いました。また、1984年に行われた同様の調査と結果を比較することで、四半世紀の間の子供の変化についても考察いたしました。その結果、家事は「母親がするもの」から「家族で分担する」方向へと変化がみられ、子供のお手伝い実施率は増加していました。この背景には、女性の就業率の増加、ライフワークバランスの推進、家庭科の男女共修などの社会的環境の変化があり、今後この傾向は続くと考えられます。家事に前向きに取り組む子供は、家族の一員として自覚と自信をもって生活し、将来の自分の家庭に明るい展望を抱いている様子が見られました。これらの子供の背景には安定した家庭の様子がうかがわれ、『お手伝いは家庭教育を示すバロメーター』と考えられました。幸せな家庭生活を送る一つの方法として、子供も含めて家族みんなで楽しく家事に関わることができるようサポートしていきたいと考えています。

※1984年の調査は、東京成徳大学 深谷昌志教授が行ったものであり、今回(2011年)の調査は同教授と共同で行いました。

## ■ 調査概要

対象 首都圏(3校)、関西圏(4校) 小学4-6年生N=1192 その親N=1014 [図1, 2]

時期 2011年2-3月 方法 学校を通じた質問紙調査

※調査結果(図3~16)は、不明回答を除いた割合で示してある。

数字は実数(人)

地域	関東	関西	不明
	457	557	12
子供の性別	男の子	女の子	7
	510	483	
子供の学年	4年生	5年生	6年生
	363	295	330
記入者	お母さん		それ以外
	886 (87.4%)		37 77
記入者の職業	フルタイム	パート	専業主婦 家業・その他
	223	385	282 101
家族の協力	協力的		非協力的
	490		494 30



数字は実数(人)

地域	関東	関西	不明
	528	664	0
性別	男の子	女の子	49
	600	543	
学年	4年生	5年生	6年生
	416	335	407

図1 対象者



図2 対象者



## 【参考】

1984年調査 深谷教授が行った調査(小学生ナウ vol.4-5)

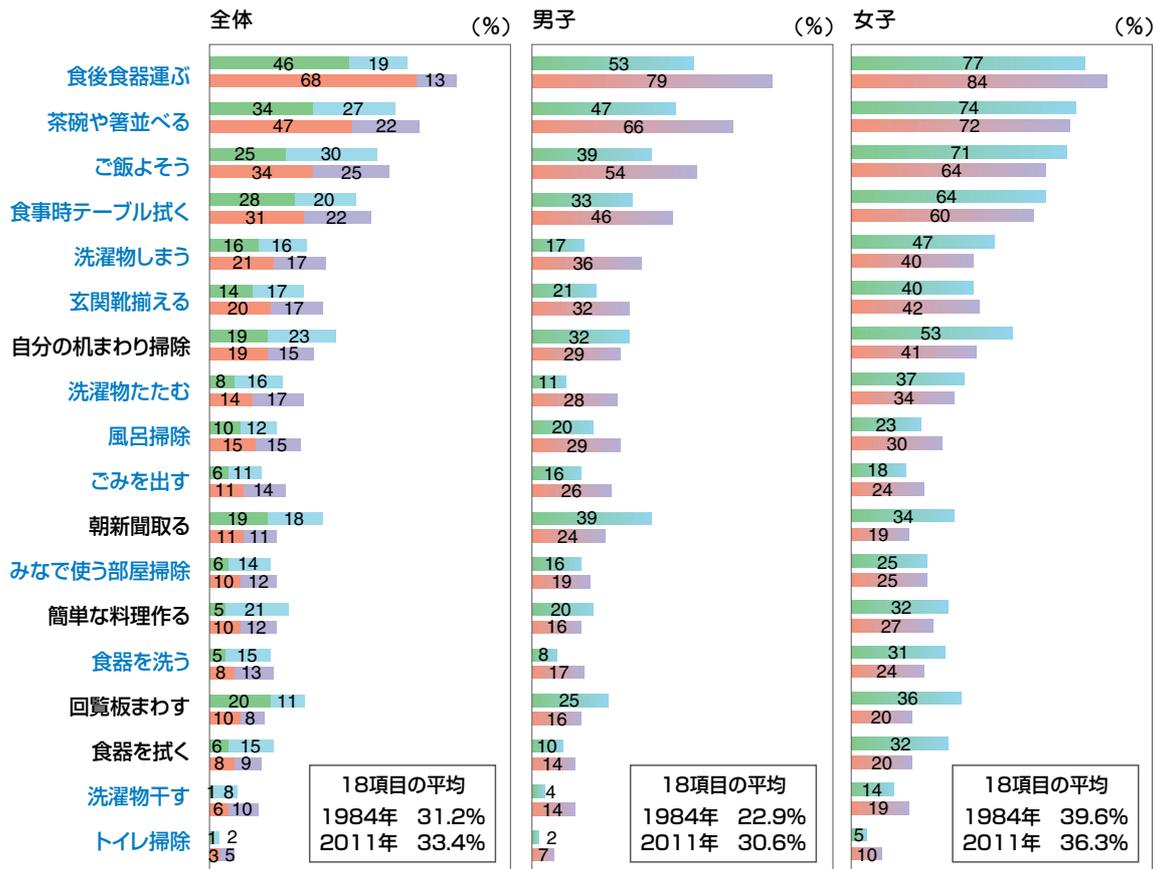
対象 関西圏の小学生 N=1664 調査時期 1984年2-3月

方法 学校を通じた質問紙調査

■ 調査結果

● 子供のお手伝い実施率は27年前と比較して増加、特に男子の実施率がup。

多く実施しているお手伝いは、食事のセッティング（茶碗や箸並べ、ご飯をよそう、テーブルを拭く）と片付け（食後の食器運び）。男女で比べるとほとんどの項目で女子の実施率が高い。1984年と比較するとお手伝い18項目中、13項目で実施率が増加。週3回以上の実施率の18項目の平均は、1984年31.2%→2011年33.4%とわずかながら増加。男子は、22.9%→30.6%と7%増加。一方で、女子は39.6%→36.3%と減少〔図3〕（図は整数で表示）。



1984年調査 2011年調査  
 ■ 毎日している ■ 週3日くらいしている

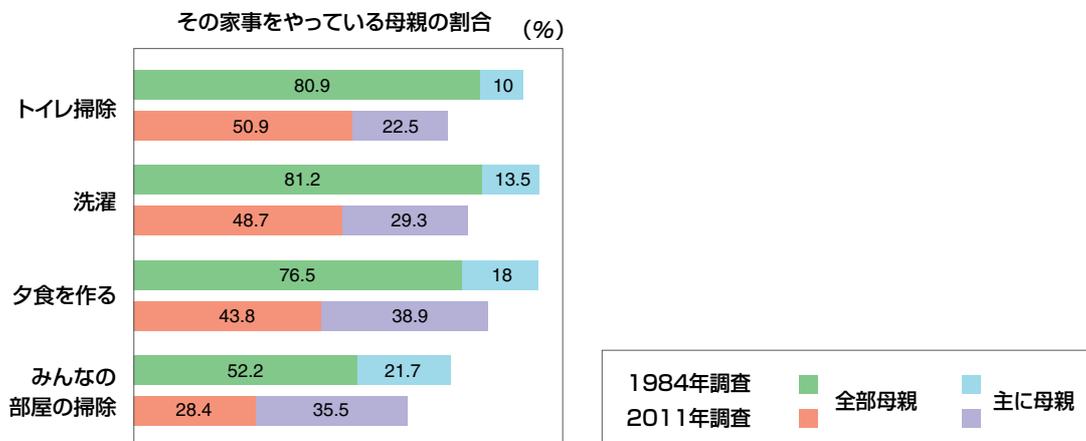
青字は全体で2011年>1984年の家事  
 男女のグラフは〔毎日〕+〔週3回くらい〕の合計

図3 手伝う割合の変化



<参考> 母親の家事分担の変化、27年間の子供の変化

子供に「その家事は家では主に誰がやっているか」を聞いたところ、いずれの家事も「全部または主に母親」と回答した割合は減少し、他の家族と分担するようになってきた様子がうかがわれた。



子供から見た母親の家事分担率



●「自分の机まわりの掃除」「洗濯物をたたむ」「みんなで使う部屋の掃除」はやった方がいいと思っているが、実際はできていない。

18項目について、自分がやった方がいい(是非したほうがよい+まあしたほうがよい)と思っている子供の割合はいずれも60%以上と、家事に取り組む気持ちは前向き。しかし、週3回以上の実施率平均は約33.4%。ギャップの大きい項目は、「自分の机まわりの掃除」「洗濯物をたたむ」「みんなで使う部屋の掃除」など〔図4〕。

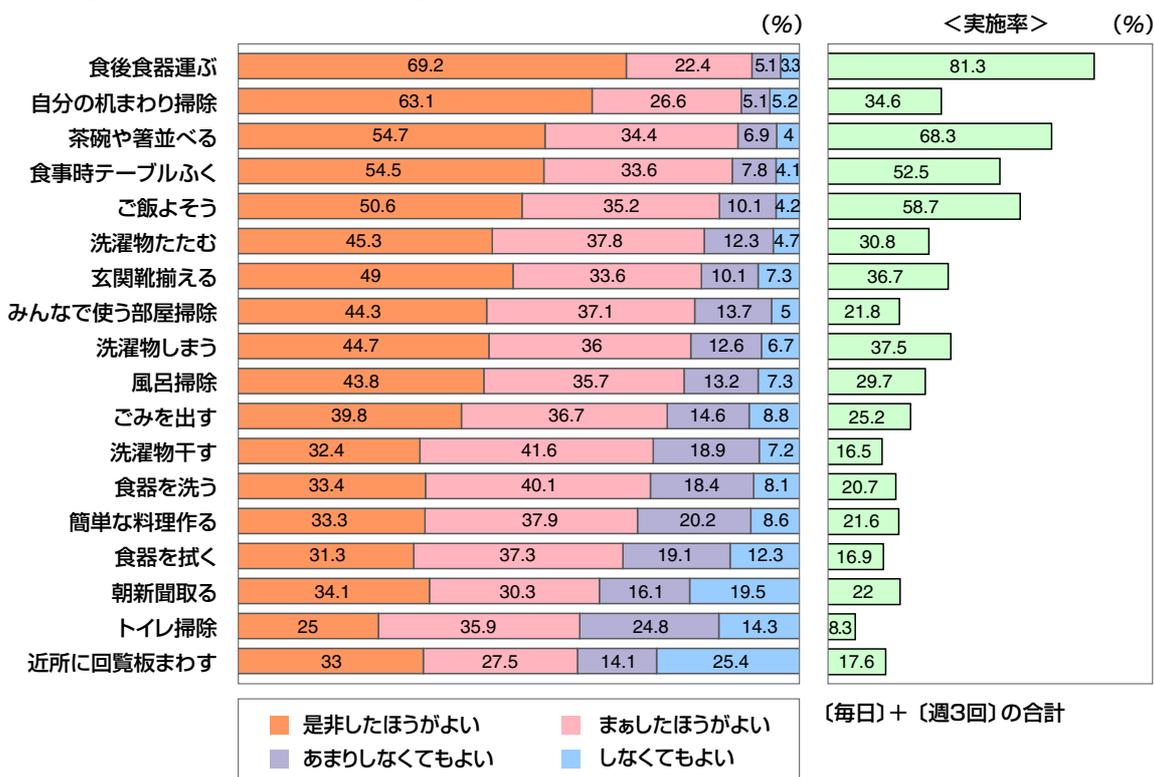


図4 やった方がいいと思うお手伝い



●お手伝いは好きだし、楽しい。お手伝いは、勉強にはあまり役にたたないが、お手伝いをすると家庭や人柄がよくなると思っている。

お手伝いが(とても+わりと)好き、楽しいと回答した割合はそれぞれ61.2%、67.0%と6割以上。「自分から手伝う」と回答した割合も49.5%とほぼ半数。お手伝いは、(とても+わりと)「幸せな家庭をつくれる」、「思いやりのある人になれる」「よく気がつく人になれる」ことに役立つと回答した子供は、それぞれ83.8%、81.1%、80.9%と多数を占めており、女子の方が効用を信じている。しかし、「勉強に役立つ」は43.7%にとどまった〔図5,6〕。

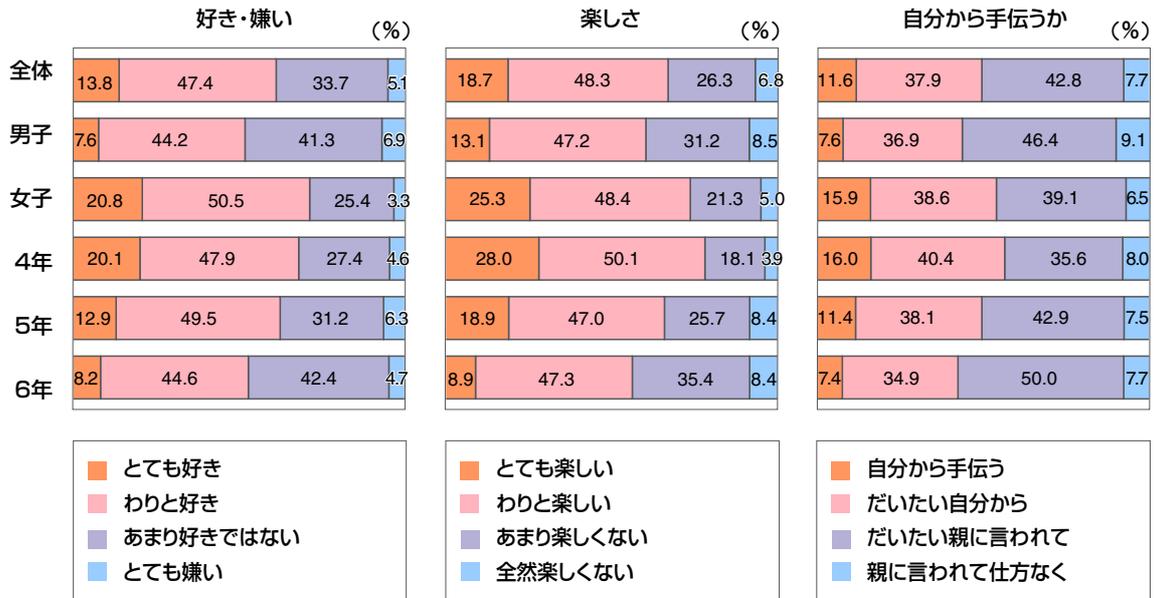
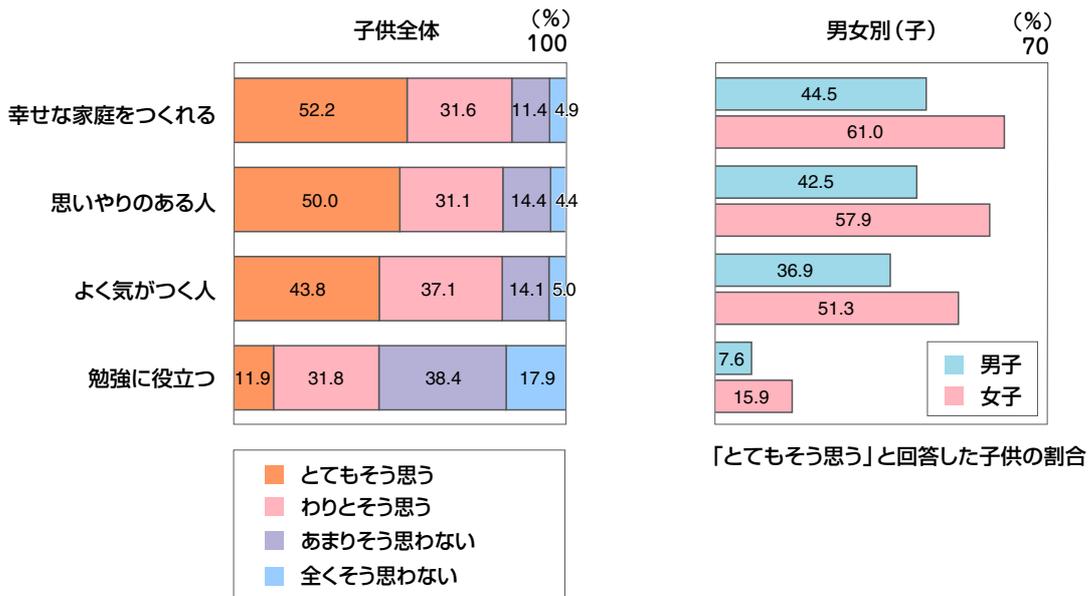


図5 お手伝いに対する気持ち



「とてもそう思う」と回答した子供の割合

図6 お手伝いはどんなことに役立つのか? (お手伝いの効用)



●母親が有職の家庭では子供のお手伝いをあてにしており、子供と一緒に家事を楽しんでいる。また、家族が家事に協力的な家庭の方が、子供が喜んで手伝っている。と親は思っている。

「決まったお手伝い」のある家庭は59.1%。家族が家事に協力的な家庭の方がその割合が高く、「喜んで手伝ってくれる」割合も高かった。また、母親の職業により、お手伝いに違いが見られた。「決まったお手伝い」のある割合は、「フルタイム」「パート」では、それぞれ62.1%、61.3%であったが、「専業主婦」は55.9%と割合が少なかった。内容をみると、専業主婦の家庭では「食器を運ぶ」が多かったが、フルタイムでは「洗濯物をたたむ」「ごみを出す」が多かった。また、「フルタイム」「パート」では「子供が手伝ってくれると助かる」「子供との家事はとても楽しい」という回答の割合が高く、フルタイムでは「しつけのため」「手伝いより勉強をしてほしい」は少ない傾向がみられた〔図7,8〕。

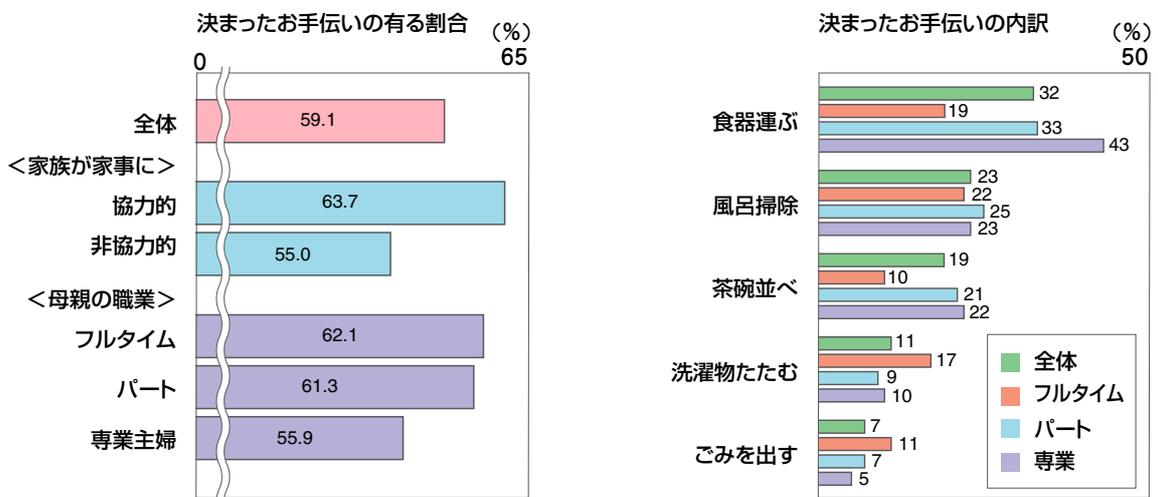


図7 決まったお手伝い

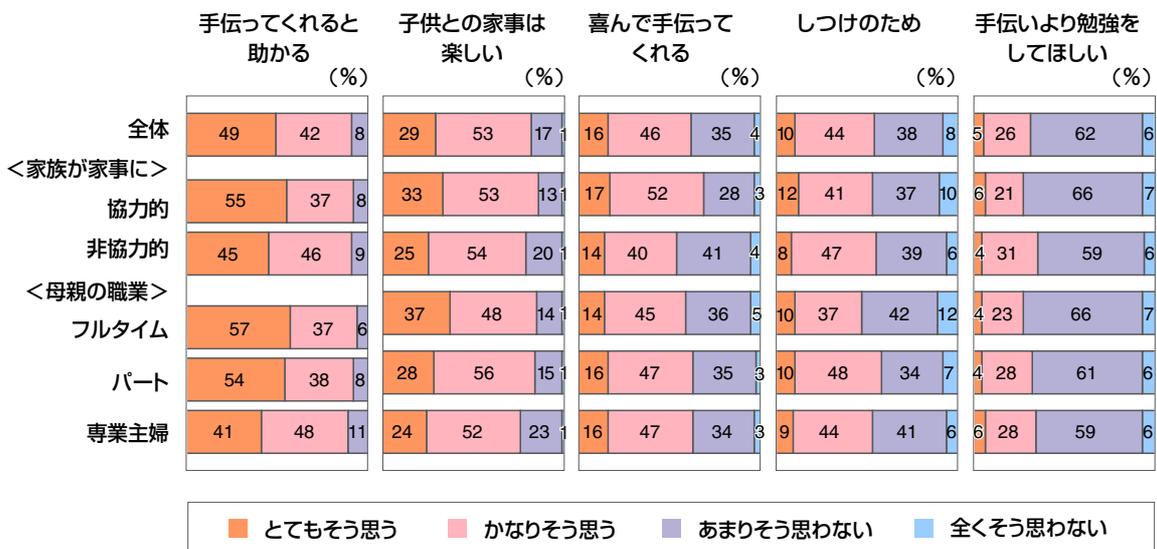


図8 子供のお手伝いに対する気持ち



● “手伝う子” はしっかりした生活習慣をもち、家庭での居心地がよく、将来像も明るい。

よくお手伝いをする子 = 「手伝う群」は、お手伝いの実施率はいずれの項目も高いが、あまり手伝わない子 = 「手伝わない群」は、「食器を運ぶ」程度しかしていない〔図9〕。手伝う群は勉強時間が長く(1時間以上 78.1%)、テレビの視聴時間が短い(3時間以上 19.4%)。一方、手伝わない群は勉強時間が短く(1時間以上 56.6%)、視聴時間が長い(3時間以上 35.5%)傾向がみられた〔図10〕。家庭の雰囲気ではどの項目も、手伝う群 > 手伝わない群であり、特に「皆で家の仕事をする」については顕著な差がみられた〔図11〕。また、お手伝いの効用、現在の自分に対する自己評価、将来像のほとんどの項目についても手伝う群の方が「とてもそう思う」と回答する割合が高かった。特に、将来「よい父・母になれる」「幸せな家庭がつかれる」についてはその差が大きく、将来の自分の家庭に対する明るいイメージを抱いているものと推察された。〔図12,13,14〕

「手伝う子」「手伝わない子」のグルーピングに関しては深谷教授レポートP37参照

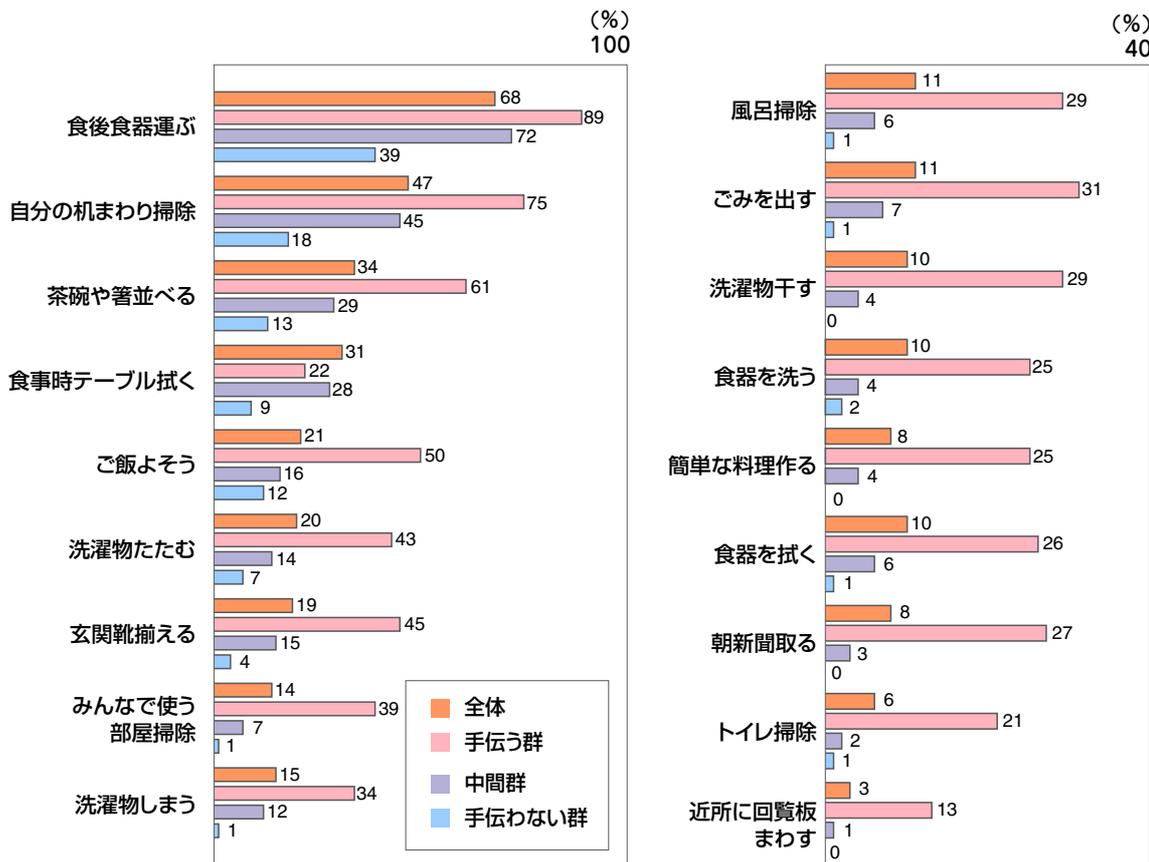


図9 手伝っている家事



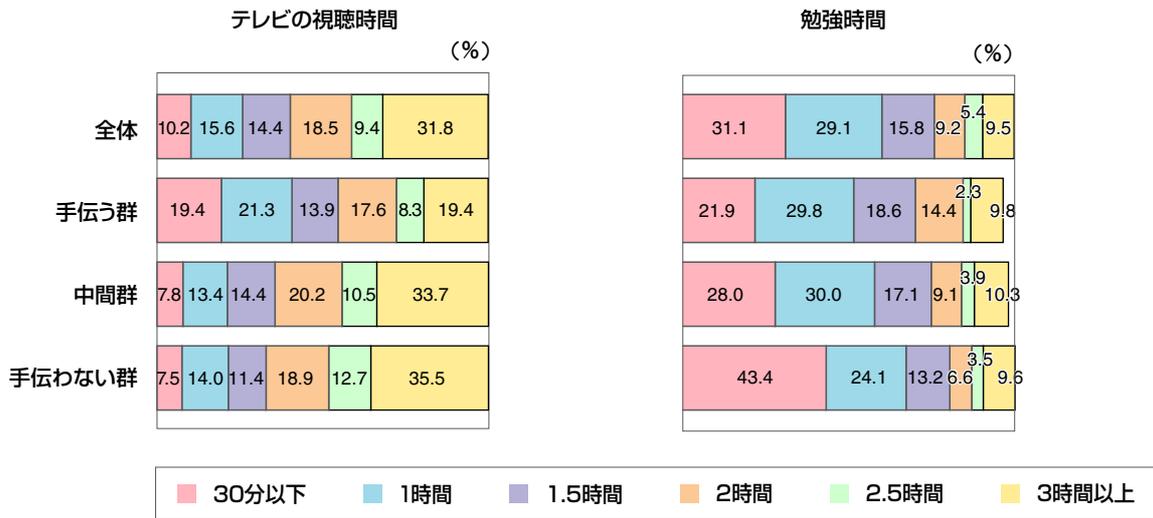


図10 生活習慣

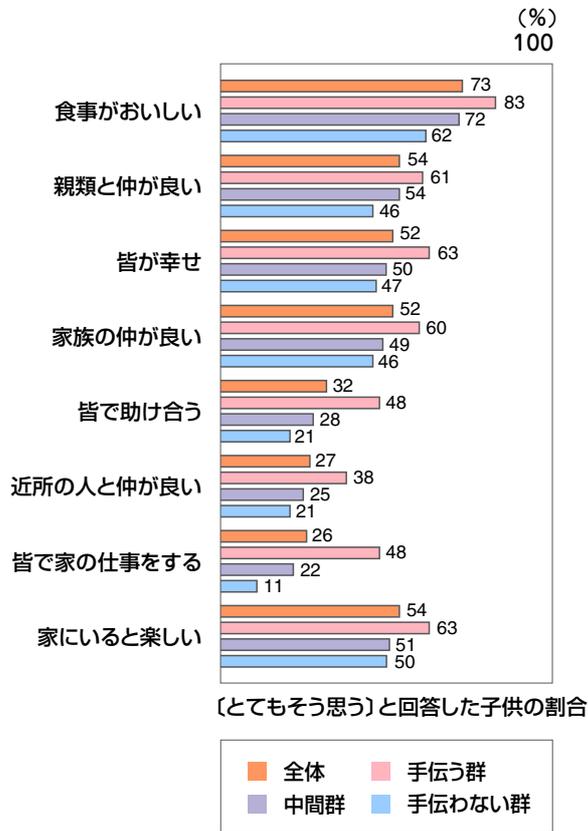


図11 家庭の雰囲気

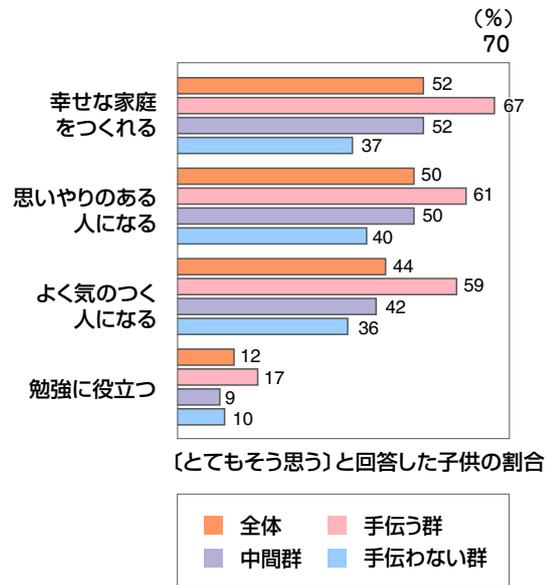


図12 お手伝いの効用



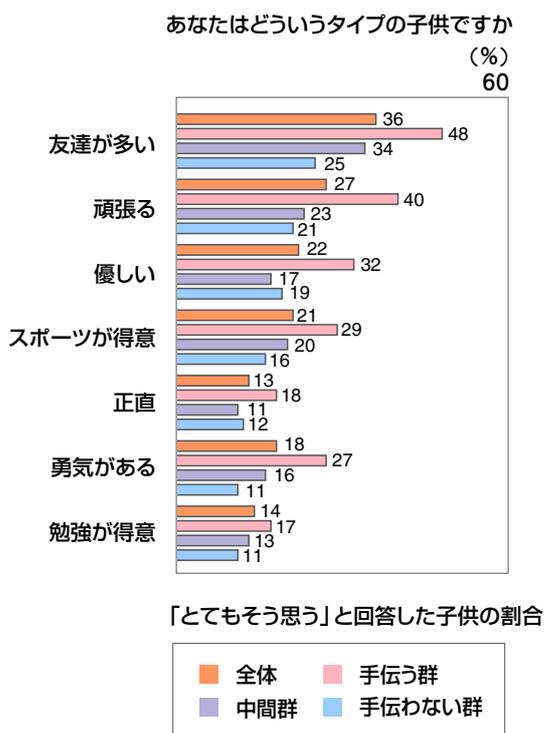


図13 自己評価

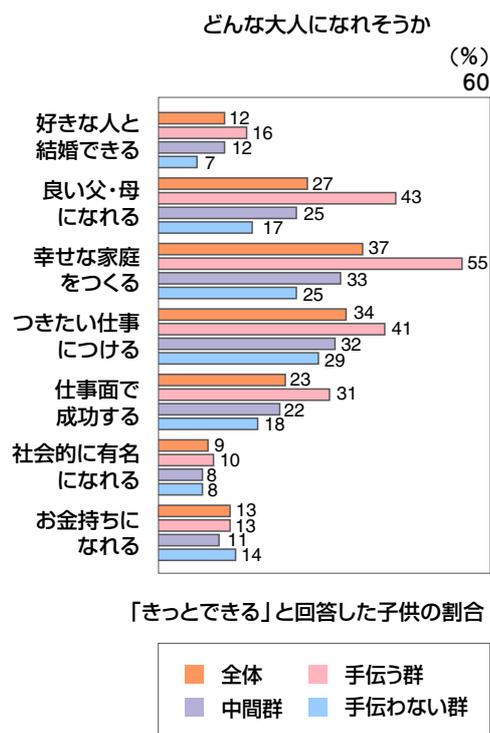


図14 将来像



手伝う子どもは生活習慣がしっかりした明るい自己像をもっていた。手伝いは子ども個人というより子どもの背景に安定した家庭があるのを感じる。安定した家庭の中で、親に支えられ、そうした雰囲気の中で家事を手伝っている子どもの姿を感じる。そうした意味では、「手伝い」は家庭が充実し安定しているかを示すバロメーターの意味を果たしている。端的な言い方をするなら、子どもの手伝いはその家庭のしつけがうまくいっているかどうかを反映している。

親の立場からすると、子どもに手伝ってもらう必要はないかもしれない。しかし、子どももいずれ家庭を持つことになる。そうしたとき、家事力をもっていないと家庭を支えるのは難しくなる。そうした意味では、子どもの将来のためにきちんと家事を手伝わせるのが親の使命であろう。それと同時に、家庭は親だけでなく、みんなで支えていくものという感覚を子どもに持たせるのも親の役割であろう。「たかが手伝い」ということも可能だが、「されど手伝い」で、本調査は、手伝いが子どもの自画像の中核を支えることを明らかにした。それだけに、親はもう少し自信をもって子どもに手伝わせて欲しいと思った。

東京成徳大学教授 教育学博士 深谷昌志